

ご挨拶

吉田睦

20世紀末の1999年4月に千葉大学文学部に赴任をしてきました。ソ連崩壊が1991年ですから、まだ「ポストソ連期」などという言い方が出来ていた時です。その後気の早い若手研究者はポスト「ポストソ連期」研究会（ポスポス研）などという用語を持ち出してプロジェクト研究会のサブタイトルにしたりしていました。が、2022年に至って、「ロシアがソ連のままだった」、ということに思い至る人も少なくないことかと思えます。いや正確には「ソ連もロシアのままだった」ということかも知れません。まあ初っ端からのロシアに関する論評はこれくらいにしておきます。

丁度四半世紀の間、文学部人文学科日本・ユーラシア文化コース（元日本文化学科）に籍を置いて、「ユーラシア学」的な位置づけで授業や研究をする、というとても居心地の良い環境に身を置くことが出来ました。赴任当時から未熟な私を引っ張ってくれた荻原真子先生や中川裕先生他同僚にも恵まれ、ほぼ無事に任期を全うするのが目前となりました。前職の外交官庁での国家公務員としての業務、そしてその後のロシア遊学の時代を過ごしてきた私は大学という労働環境と無縁な生活をしてきただけに、大学人として仕事をしてきた同僚の方々から多くのノウハウを教示され、ここまでやってきたというのが実感です。

この間、国立大学の独法化という改革プロセスがあり、助教授が准教授に単に名称変更となり、さらによくやく学部改組となったと思うと、変わったのは日本文化学科から日本・ユーラシア文化コースという所属科の看板のすげ替えのみ、泰山鳴動ネズミ一匹・・という状態でした。もちろん「日本」に所属するモンゴル、中国、シベリアという名称上の制約からは解放されることになりましたが、依然として日本と並列するユーラシア（ユーラシアに包含される日本ではない）という状況の中での組織運営のままです。この間、大学院の方は学部以上に変容した感があり、文学部の教員に加えて法政経学部、教育学部、国際教養学部の教員も入った大所帯の組織（人文公共学府）になりさらに訳が分からなくなっています。がユーラシア言語文化論講座という学部の講座の陣容に国際教養学部の周飛帆先生をプラスした鉄球のようなユーラシア玉（魂？）のままで行動できたことはうれしい限りでした。ユーラシア言語文化論講座の文化部門は、文化人類学というディシプリンは堅持しつつ、それに拘泥しないで済む環境というのも特異な教育・研究環境かと思えます。とはいえ、学部学生という点ではかつては「日本文化学科」という看板、改組後も「日本・ユーラシア文化コース」という看板の下で、なかなかドンピシャリの人材を集め

ることができてきていません。このことは、学部内のフィールド学関係の諸学が集まらないと望めない環境かと思います。つまり文化人類学、社会学、プラスフィールド言語学等でしょうか。15年くらい前にその構想を抱いた（社会学の）先生もおられました。文学部の現員と「伝統」の厚い壁に阻まれて実現しませんでした。学部改組もそうですが、外から見ると革新的に見えた大学教員という職場集団が、実はきわめて保守的・現状維持志向か、ということも痛感してきました。近い将来文学部内の改組の可能性はほとんどないと思いますが、それより上のレベルでの統廃合？があるかもしれませんね。（と他人事のように語ります）

教育という面では、私自身大学院では指導学生と言える学生はほとんど育成してこなかった。指導学生の直接の思い出としては学部生に尽きると言っても良いかと思います。学部の直接の指導学生の人数は、年平均数人とする。25年間で合計70~80人の学部生を指導してきたかもしれません。卒業後、年賀状をくれる学生もごく一部ですがいます（いました）し、思い出して大学を来訪してくれた学生もいます。なぜか女子学生だけが、結婚式に呼んでくれた学生も4名いました。そのうちの一人は雪の青森での結婚式でした。

大学院では私を除いた教員が、多くのユーラシア系の人材を輩出してきています。そのことは中川先生他指導をしてきた当人たちの文章をご覧になった方が簡潔かつ確実でしょう。今後のユーラシア言語文化論講座についてですが、大学の3年間後任教員不補充（愚策のために適正な人材を適時に採用することができなくなっています。その大きな壁はありますが、今残っている教員たちが踏ん張って礎を死守されていくことを祈念しています。いや草することができる人たちだと思っていますので、その点はあまり心配していません。

最後に同僚でかつ同年で私の赴任時からずっと共に講座で仕事をしてきた菅野憲司先生について述べます。彼とは（私に限らず）指導上、教育上、あるいは生活信条の上での見解の相違で確執も多かったことは否めません。それでも同時に退職するとばかり思ってきましたが、つい1か月ほど前に休職中のまま訃報が届きました。同じ時期、同じ場所で、ある時は共通の目的のために共に戦ってきた人間として、心よりご冥福をお祈りいたします。

（よしだ あつし・千葉大学大学院人文科学研究院）